



知財業界に必要な、翻訳ができる「やさしい日本語表現」

NIPTA 理事

日本アイアール知的財産活用研究所 矢間 伸次

たまに会う中学校時代の同窓会は楽しい。終わった人たち？の集まりは、現況報告と旅行話から始まる。行き着くところ健康談義で場が盛り上がる。耳が遠くなったので都合の悪い話は聞こえない、目が悪くなったので先(行く末)が見えない、物忘れが酷くなったので“呆けるが勝ち！”といった類の話は、笑い飛ばして楽しめる。

私の旅行話は、長春・瀋陽・大連への旅行(2017/6月)である。「妻は、この旅行に備えて「日⇄中」翻訳ソフトをiPhoneに入れたが、いつもの調子で「コテコテ日本語」を入力して変換。しかし意味不明で伝わらない。“この翻訳ソフトは、お馬鹿さんで使えない”と、不機嫌。そこで私が、どんな日本語を入力したのかを確認。文章を作り直して再入力。相手は“解ります”と嬉しそう。“やはり翻訳ソフトは賢いわね”と妻の機嫌が、コロッと良くなった。といった、たわいのない話である。

S君は、私の話を聞いて、いちいち頷いてくれる。彼の娘さんは、アメリカ人と結婚しており、アメリカで暮らしている。娘さん家族との近況報告はメールを使って、英語でやり取りしている。今ではコミュニケーションが上手に取れるようになった、と嬉しそう。彼は、英語が苦手であることを吹聴していた

筈だが、それが、なぜ？

彼の説明によると、まず自分の日本語を①の翻訳ソフト^(*)で英語へ翻訳し、その英文をコピーして、②の翻訳ソフト^(*)にかけて日本語へ翻訳する。そうすると変な日本語がでてくるので、日本語を修正し、再度①の翻訳ソフトを使う。このように2つのgoogle翻訳ソフトを行ったり来たりしてやっている。このやり方で翻訳した英文を英語の達人に見せたことがある。家族へ出す英文にしては「固すぎる」と言われた。しかし一番大事なことは、相手に伝わることであるから、と合格を貰ったようだ。そして彼は、私に言う。技術論文や特許明細書であれば、翻訳ソフトの支援が受けられるのではないか、と。

そのとおり、発明技術の説明は、事実を矛盾なく明確に伝えることが目的である。論理力は必要だが、文才は必要ない。要するに日本文化に根ざした叙情的で美しい、あるいは阿吽の呼吸を期待した以心伝心の「文化日本語」でなく、世界へ「物、事、考え」を伝える為の平明日本語、即ち「文明日本語」で書けば済むことである。彼が指摘したとおり、特許文書の翻訳は、翻訳ソフトの支援が受け易い「文明言語」の世界である。

彼が言うには、「当初は面倒だったが、英語でやり取りができる喜びは大きい。英語が苦手であっても、やさしい日本語で書けば、翻訳ソフトのお陰でコミュニケーションが成立することがわかった。良き時代にリタイア出来た自分は幸運である」と。

現地代理人とのコミュニケーションに、このような方法を探っている知財担当者も多いと聞いている。「アレコレ」とやり取りする中で、翻訳ができる「普遍的な日本語表現」を強く意識するようになり、言語障壁の敷居も格段と低くなっているようだ。こちらから日本語を渡せば、現地代理人は翻訳ソフトを使って対応してくれるようになった、という話も聞いている。

- (*) ①の翻訳ソフトは、iPhoneに常駐している翻訳ソフト:(ネット環境が無くても使える。過去に翻訳した履歴が残る、自分だけの「辞書(AI)」を構築できる)。
- (*) ②の翻訳ソフトは、ネット上で翻訳するgoogle翻訳ソフト:(ネット環境が無いと使えない。)

朝日新聞の夕刊「現場へ(7/1-5)」に「やさしい日本語(刀祢館正明)」が掲載されていた。日本に住む外国人が増えれば、外国人にも分かりやすいように工夫をし、簡単にする日本語のことである。いろんな分野で「やさしい日本語」が構築されている様子を記事にしている。例えば「災害避難の呼びかけ」や「医療、介護の世界」など多岐に及ぶ。知財業界も取り残されずに「やさしい日本語運動」を推進すべき時期にあると思う。

余談だが中でも厄介なのが「お役所言葉」で、苦笑させられた。「税金を納める」を「税金を払う」へ変えるには抵抗があるらしい。

「税金を納める」は、どのように英訳されるのか、それが知りたい。そこで英語の達人に教えを被った。彼の英訳は、Tax Pyer

(タックスペイヤー)である。その意味は「税金を払う人」。向きを変えれば「議員や行政官が最も丁寧に接しなければならない人」。「税金を納める」と「税金を払う」の日本語の意味は微妙な違いがあるようだ。例えば「納められた税金」の使い道は、お上が決める。「払った税金」の使い道は、払った人の意見を取り入れてくれそうである。このように日本語の解釈は奥が深く、実に悩ましい。日本文化に根ざした日本語表現を英語訳すると、どのような意味になるのか「アレコレ」と考えると興味が尽きない。

村上春樹・柴田元幸:「本当の翻訳の話をしよう」(出版:スイッチパブリック)が興味深い。村上春樹さんが高校生の時代から英語文学の翻訳をしていたことは知らなかった。彼の作品(小説)は世界の人達から広く読まれていることは御承知のとおりである。英語文学の翻訳を数多く手がけてきたことが自身の才能と結びつき、村上春樹の世界を作り上げて来たと思う。その世界の底流に流れているのは「言語の扱い方」である。つまり、誤解がなく正確に翻訳できることを強く意識した“普遍的な日本語表現”を考え、考え抜いていることがよく分かる。そのような作者の「創作作法」が読者への、あるいは翻訳者への礼儀作法であることが、この書籍から改めて教えられた。

特許翻訳の品質については、翻訳者に全てを任せるのではなく、原文を起す人の日本語表現にも責任がある。翻訳者は「おかしい、解り難い」と思っても原文に忠実翻訳するしかない。翻訳者は勝手に意識することは許されない。しかも翻訳作業に掛かる時間の多くは「日⇄日」翻訳である。生産性が悪いにも拘らず翻訳代金を上げることは難しい。翻訳作業の効率を高め翻訳品質を高めるには、翻訳ソフトの支援が受け入れやすい特許翻訳の世界を実現するしかない。